

『おむすびころりん』

みなさんは、ご自分のご両親やおじいちゃんおばあちゃんから昔ばなしをお聞きになったことはありますか？ 僕は、子どもの頃は祖父母と遠くはなれたところに住んでいたもので、残念ながら昔ばなしを聞いた記憶がありません。母父からありません。父は浅草の生まれですから仕方ありませんが、母の田舎は栃木の農家だったのになぜ母が昔ばなしをしてくれなかったのか不思議でなりません。でも、寝る前に絵本を読んでもらった情景は、今でもまぶたを閉じると浮かんできます。

昔「日本昔ばなし大学再話コース（石川）」に参加したことがありました。これは、日本を代表する識者の小澤征爾の実兄である小澤俊夫先生が指導しているもので、全国各地で昔ばなしの勉強や再話をしています。石川県でも、昔ばなしの「語り」や「読み聞かせ」などを行っている「お話会」のメンバーを中心に活動しています。僕も、グリム童話に興味のある学生が多いこともあって、そして妻が「お話会」をやっているのので、小澤先生の下で色々とおぼろげに学ばせていただいているわけです。そして、「再話コース」ですので、石川県で採取された昔ばなしを中心に、それを現代の子どもたちにも分かりやすいように、編集していきます。でも、その編集作業は、昔ばなしに特徴である構成ルールに従わなくてはなりませんし、また実際、語って語りやすいものでなくてはなりません（もちろん、聞き手も理解しやすいことが前提です）。僕も、キツネを逆に人間が騙すお話しや中国の民話を共通語に再話しました。

さて、その勉強会の最中に、偶然ふたごが出てくる昔ばなしに出会いました。世界中にふたごが出てくる昔ばなしは山ほどあるのですが、実は、日本においてふたごが出てくるものはほとんど目にしたことがありませんでした。僕はすっかり嬉しくなっていました。

「うさぎ浄土」（あらすじ）

むかし、山で木を切っていたおじいさんがお昼ご飯のお弁当を食べようとすると、草の間の穴から白うさぎが顔を出し、いかにもおにぎりを食べたそうでした。心の優しいおじいさんは、おにぎりを穴に転がしてやりました。すると、穴から「おむすびころりん、すつとんとん」と歌声が。おじいさんは不思議に思って、もう一個おにぎりを転がしてやると、また「おむすびころりん、すつとんとん」と歌声がしました。楽しくなったおじいさんは、おにぎりを全部転がしてやります。次の日もその次の日もおにぎりを転がしてやりました。あるとき、おにぎりどころか重箱まで転がすと、「重箱ころりん、すつとんとん」との歌声。どんなうさぎだろうと穴をのぞいたひょうしに、おじいさんはつまずいて穴に落ちてしまいました。すると、なんと今度は、「じいさんころりん、すつとんとん」との歌声が。見廻すと、穴の中の広間で、うさぎが餅つきをしていました。うさぎたちは、おじいさんにおにぎりのお礼を言うと、餅を振舞ってくれました。おじいさんが帰ろうとすると、うさぎたちは奥から小槌を持ってきて、持たせてくれました。それは、なんでも願いがかなう小槌でした。おじいさんは家へ帰ると、「ばあさん若くなれ、じいさん若くなれ」と言いながら、小槌を振りました。すると、なんとおばあさんとおじいさんはすっかり若返ってしまいました。つぎに、「赤ん坊が欲しい」と言いながら振ると、今度は男の子と女の子の赤ちゃんが飛び出してきました。おじいさんとおばあさんは、赤ちゃんを一人ずつ抱くと、綺麗な家やお金を振り出して、四人で幸せに暮らしました。これで、昔きり。

（出典『日本昔話通観』第11巻、同朋社）

これは、有名な「ねずみ浄土」（呪宝型）という昔ばなしのウサギ版（富山市で収録）です。みなさんには、「おむすびころりん」と言った方が通じやすいと思います。小学校の教科書にも収録されている有

名なお話しです。「おむすびころりん、すつとんとん」といえば、自然に踊りだしてしまいそうな楽しいものです。昔ばなしの世界では、動物に親切にすると必ず幸せになることになっているのですが、優しいおじいさんは、おにぎりのお礼に小槌をもらいます。そして、その小槌を振ると、大金持ちになるのですが、子ども（しかもふたご！）も授かるのです。おじいさんおばあさんには、小槌によって若さ（生命力）、富、子孫が与えられています。子孫繁栄と幸せの象徴が「ふたご」なのです。しかも、男と女の二卵性双生児です。

さきほど、日本の昔ばなしにはほとんどふたごが登場しないと申しあげました。昔ばなしにおいては、「ふたご」は結構好まれたテーマで、世界中にふたごが活躍する昔ばなしが伝わっています（有名なのは、グリム童話の「二人兄弟」「黄金の子ども」「ラプンツェル」「忠臣ヨハネス」など）。また、日本の神話においては、イザナギ・イザナミのような重要な登場人物にふたごがいます。それにもかかわらず、日本の昔ばなしにはふたごがほとんど出てこないのです。なぜでしょうか？ 理由は色々と考えられると思いますが、昔ばなしが成立した近世（たとえば、江戸時代）において、ふたごに対する偏見があつて、ふたごを昔ばなしに登場させない意志のようなものが日本人の意識の根底にあったのではないのでしょうか。しかし、今では事情は全く違います。むしろ、ふたごがうらやましがられる時代です。もちろん、実際ふたごを育てている方々にはとても大変な時期もあるのですが、それでも一般の人々におけるふたごのイメージは良好です。ツインマザークラブの天羽先生がなさったふたごのイメージについての国際比較の研究においても、日本における最近のふたごに対する良好なイメージは明らかにされています。たとえば、自分がふたごだということを明かすと、必ず人々は興味を示し、いろいろなことを知りたがります。そして、本当に楽しそうにニコニコしながらふたご体験談を聞いてくれます。場合においては、一瞬にして、酒宴のスーパースターになることがあるほどです（ちょっと大げさでしょうか？）。

僕は、ふたごを育てる時、そしてふたご自身がふたごとして育っていく時、ふたごに対してどのようなイメージを持っているかということが、とてもとても大切なことと思っています。辛い育児の時期においても、ふたごということ自体に対しては良好なイメージ・感覚を持ち続けることは重要です。そして、ぜひその感覚をお子さんたちと共有していただければと思います。ふたごは一人で生まれてきた子どもと比較にならないほど、両親に感謝の気持ちをもっています。もし、ふたごに対する両親のイメージが良好なものであれば、その感謝の念と両親への愛情は、もっと深いものになることでしょう。

よろしければ、今晚にでも、『ぐりとぐら』や『ふたごのラッコ』、『北極のムーシカ ミーシカ』、『リトルツインズ・シリーズ』、『ティモシーとサラ・シリーズ』、『おふろだいすき』など、ふたごが活躍する絵本や昔ばなしを読んであげてください。

『ツインズぷらす』第12号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正